

日常に感じる平和

山王中学校3年 須藤 サスケ

私は、「平和」という言葉を、ニュースや教科書の中でよく耳にする。「平和」とは戦争のない状態などを思い浮かべる人が多いだろう。しかし平和とは単に戦争の無い状態ではなく日常生活の中に隠れているものではないかと、考えるようになった。

きっかけは国語の授業でやった「字のない葉書」という物語だ。この物語は戦争中の暮らしを書いた物語だ。この中で印象に残っている部分があり、それは妹が学童疎開をしているときに梅干しの種を、しゃぶっていたという場面だ。このことから食べ物がお腹いっぱい食べられなかったのだと思った。それによって私たちが毎日ご飯を食べていることはとても幸せで平和なことなんだと感じた。

世界に目を向けると、今もなお戦争や貧困に苦しんでいる人がいる。そうした現実を知ると私たちが毎日過ごしている日々は当たり前のことではないと強く感じた。

では、私たちに何ができるだろうか。平和を守るため特別なことをしなければと思っていた。しかし、平和は小さな行動の積み重ねから始まるのかもしれない。自分は友達が辛い時に気づいてそばにいたり、他の人が面倒でやらないことをやってみようと思う。こうした日常の一つひとつが、平和の土台を築いていくのではないだろうか。

友達同士でも平和について考えるときがある。異なる意見を持つ人と議論したとき、最初はぶつかることがあった。しかし、相手の立場に立って考えてみると、そこには自分とは違う思いや経験があることが分かった。このときお互いがお互いのことを理解しようとする気持ちが平和的解決につながるのではないかと感じた。

また、SNSやインターネットをほとんどの人が使っている現代では何気なく書いた一言が、誰かを深く傷つけることもある。反対に、温かい言葉が見知らぬ誰かを救うこともある。画面の向こうにも、生きている人間がいる。その当たり前の事実を忘れずに、何かを書いたらこれは誰かを傷つけないかななど言葉を丁寧に扱うことも、現代での平和への貢献だと思った。

平和は遠い国の出来事でも、偉大な政治家だけが実現できるものでもない。私たちの心の持ち方、言葉の選び方、他者への接し方その全てが平和とつながっている。「今日も家族と笑って話せる」という幸せを世界中の人が感じられる日が来るように願っている。

そのために、私は今日も自分にできることをしっかり考え、行動に移したいと思う。毎日の日々の中で私たちは何気なく人と関わっている。友達と笑い合ったり、家族と食卓を囲んだり、電車やバスで見知らぬ人に席を譲ったり。そのような小さな出来事の一つひとつが、平和な社会を支えているのだと自分は思う。誰かに優しくされたとき、人は他の誰かにも優しくしたいと感じるものだ。その温かい連鎖が少しずつ広がっていけば、世界はきっと良い方向へと変わっていくはずだ。平和は願うだけでは生まれない。毎日の小さな行動の積み重ねでつくり続けるものだ。その一步一步が、やがて大きな光となって全世界を照らしていくと、自分は強く思っている。